第６節　木製品

ここでは、Ｂ地区から出土した木製品の器種別の分布、組成、樹種などをまとめ、起耕・整地具の素材から製品までの製作工程などについて検討する。なお、対象物は実測図を掲載した木製品のみであるが、その大要は把握できると考える。

１　木製品の分布と組成

表577では、Ｂ地区Ⅰの報告書（岐阜県文化財保護センター2012b）と今回の報告書で提示した木製品の合計708点の出土地点と遺構別の出土量を示した（表577の網掛けは右端の合計数値の14％以上の数値である）。Ｂ地区の出土地点は発掘調査時に43の地点に細分したため、それらをａ～ｉの９ブロックに分け（図2606）、器種ごとの数量を算出した。

全体では建築部材が最も多く、次いで起耕・整地具、土木部材、棒材、板材の順に多い。地点別にみると、NR002を検出したｅ地点が最も多く、次いでSD0381（大溝）を検出したｃ地点とｇ地点が多い。しかし、ｅ地点とｇ地点は起耕・整地具と建築部材が多いことに対して、ｃ地点は建築部材が突出して多く、土木材も多かった。ｃ地点のこのような様相は、ｄ地点においても同様である。なお、ｂ地点のその他の部材が多いのは、井戸枠が出土しているためである。

次に遺構種類と個別遺構ごとの組成について考えたい。全体的には溝状遺構（SD）と自然流路（NR）からの出土が目立ち、いずれも起耕・整地具と建築部材、土木材が多い。一方、柱根などが残存している竪穴住居跡（SB）や掘立柱建物跡（SH）などは建築部材の出土量が、棺材などが残存している墓（SZ）は葬送具の出土量がそれぞれ多い。

SD0381（大溝）は北側（07_42、08_7、09_19地点）、中央（06_14~16、08_6、09_5、11_6地点）、南側（10_4地点）に分けて分析した。その結果、倭鏡が出土したSD0381中央が最も出土量が多く、建築部材や起耕・整地具とともに祭祀・儀礼関連具や容器の出土も目立った。しかし、掘削面積は中央が南側の約２倍であることから、木製品の出土密度は中央と南側はほぼ同じであるといえる。一方で、SD0381北側は出土した多くの木製品が土木材（杭）であり、これはSD0381北側に設置されたSW001等との関連があると考えられる。また、SD1053やNR018は起耕・整地具の出土が少ない半面、他の溝や自然流路では出土していない匙や桶の未製品が出土していることが特徴的である。

自然流路では、SD0381と同様にNR002とNR013～016において起耕・整地具と建築部材の出土比率が高い。しかし、居住域と水流部との距離の差が起因するためか、NR001とNR013～016との出土量には大きな差が生じている。一方、NR012は水流部ではなく河原に相当する部分であり、起耕・整地具と建築部材の出土が少なく、祭祀・儀礼関連具や棒材が多く出土した。

２　木製品の樹種

表578では、Ｂ地区Ⅰの報告書（岐阜県文化財保護センター2012b）と今回の報告書で提示した木製品のうち、樹種が判別している個体683点の樹種と器種の組成を示した（樹皮材は除く）。全体では、針葉樹が385点、広葉樹が298点で、針葉樹がやや多く選択されている。器種別にみると、起耕・整地具は広葉樹が多く使用されているが、水田作業具、運搬具、漁撈具、容器、祭祀・儀礼関連具、葬送具、装身具などは針葉樹が多く、針葉樹しか選択されていない器種もある。

次に、主要な器種の樹種組成について検討する。

表 577　B地区出土木製品の地点別、遺構別組成一覧材

器種 / 地点名 遺構名	木材加工具	起耕・整地具	収穫具	水田作業具	敲打・粉砕具	編物・織機関連具	運搬具	漁撈具	武器・武具	容器	祭祀・儀礼関連具	葬送具	家具・生活雑具	装身具	建築部材	土木部材	器具部材	その他の部材	板材	棒材	その他の加工材	残材	樹皮材	合計
a		5		1		1		1	1	5	2		1		5	10			1	2	4			39
b										2				2			1	18	1	1		1		26
c		14	2	3				2	1	4	3		3	1	39	23			6	5	2	1	1	110
d	1	8	2	1	3	2				7	1		1		14	17	1		10	9	7	4		88
e	1	44		5	3	4	2	3	2	17	14	16	6	3	34	26	1	1	18	26	2	11		239
f		2								1			1		11				4	2	1	1		23
g	3	21	1	1	1	2				7	5		1		21	8		1	13	16	5	2	2	110
h										1	1				2									4
i		9		1		1			1	3	2		3		6	6			8	15	10	3	1	69
小計	5	103	5	12	7	10	2	6	5	47	28	16	16	6	132	90	3	20	61	76	31	23	4	708
SA,SB,SP,SS															40	3			2		2			47
SZ		1								1		16			5				4	1	1	5		34
SD	4	47	4	4	3	4		2	2	22	10		6		39	39		1	24	28	12	6	4	261
SK		6				1			1	2					5	9		1	6	6	1	1		39
SE																		18						18
ST										1											1			2
NR,SW		45		7	3	3	2	4	2	13	17		8	2	39	38			15	29	11	8		246
遺物包含層	1	4	1	1	1	2				8	1		2	4	4	1	3		10	12	3	3		61
小計	5	103	5	12	7	10	2	6	5	47	28	16	16	6	132	90	3	20	61	76	31	23	4	708
SD0381(北側)		5								1					5	19				1		1	1	33
SD0381(中央)	1	12	1	2	1	1		1		5	4		2		16	8			11	9	4	1	2	81
SD0381(南側)	2	14				1				3	1				7			1	6	5	1	1		42
SD1053,NR018		2							1	1					1	4			1	2	3	2	1	18
SD他	1	14	3	2	2	2		1	1	12	5		4		10	8			6	11	4	1		87
NR002		35		2	3	3	2	3	1	7	2		4	1	26	10			3	3	2	6		113
NR012		1		3						4	12		2	1	5	1			6	10		2		47
NR13～16		5		1							2		2		5				2	9	5			31
NR他		3		1				1	1	2					1	1			2	4	1			17
SW		1									1				2	26			2	3	3			38

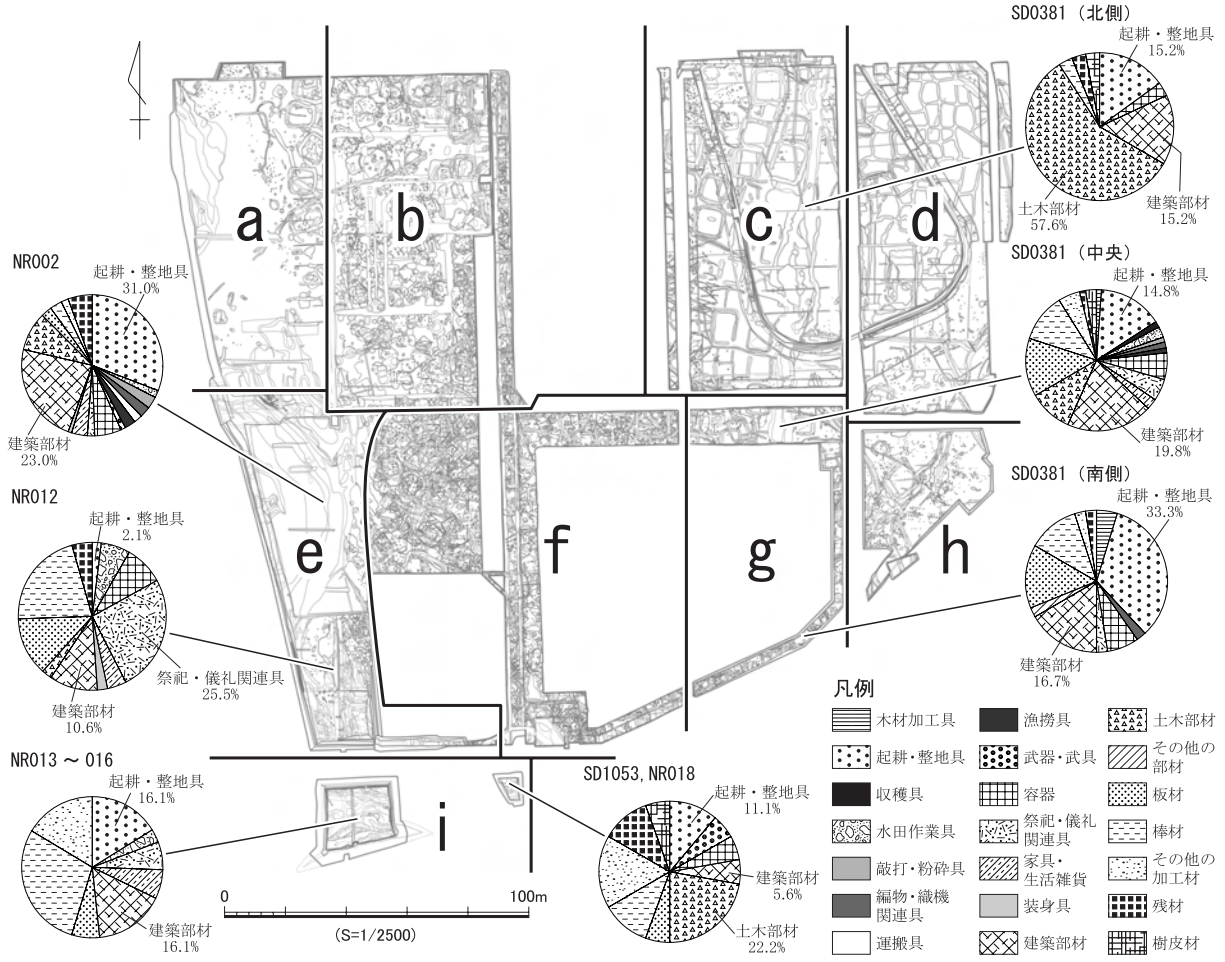


図 2606　B地区出土木製品の地点区分と遺構別組成

起耕・整地具は、広葉樹が多く、特にアカガシ亜属は全体の76％を占めており、多用していたことがわかる。針葉樹のうち、コウヤマキとヒノキ、マキ属は柄として、ヒノキ属はえぶりとして使用されており、これらの器種は針葉樹とともに広葉樹も選択されている。一方、直柄平鍬は製品、未製品ともにすべてアカガシ亜属が選択されており、泥除も製品、未製品に関わらずアカガシ亜属が多く選択されている。しかし、弥生時代中期以前と考えられる陣笠形の泥除未製品４点（掲載番号152～154、4308）の樹種はクスノキ２、ケヤキ１、アカガシ亜属１であり、アカガシ亜属が優勢とはいえない状況である。

水田作業具はすべて針葉樹が選択され、大足部材はヒノキかヒノキ属のみで、田下駄はヒノキ、スギ、アスナロ属が選択されている。

容器のうち、曲物は側板や底板、蓋、その他の付属材も含めて13点すべてが針葉樹で、スギとヒノキが多用されている。一方、栓６点もすべて針葉樹であるが、その内訳はアスナロ属３、イヌガヤ属１、コウヤマキ１、ヒノキ１であり、ヒノキが少ない。

表578　Ｂ地区出土木製品の樹種組成一覧表

器種／樹種	木材加工具	起耕・整地具	収穫具	水田作業具	敲打・粉砕具	編物・機関連具・織	運搬具	漁撈具	武器・武具	容器	祭祀・礼関連具・儀	葬送具	家具・生活雑具	装身具	建築部材	土木部材	器具部材	その他の部材	板材	棒材	その他の加工材	残材	合計
アスナロ属	1			3		2				5	14			2	14	1	1	1	15	12	5	2	78
イヌガヤ属								1	1	1						4				2	1	1	11
カヤ								1							1							1	3
コウヤマキ		1								3	1				9				2	3	1	2	22
スギ	1			2			1			7	3	12	3	2	9	4			11	5	3	3	66
ヒノキ		2	1	6	1	4	1	1	1	11	4		4	1	24	12	1		7	6	5	2	94
ヒノキ科															2					1			3
ヒノキ属	1	2		1						6	5		3	1	8	3	1		8	14		1	54
マキ属		1						3	1	1						2							8
マツ属															1	7		18	2	1	1		30
モミ属										2		1			4	1				8			16
針葉樹小計	3	6	1	12	1	6	2	6	3	36	27	13	10	6	72	34	3	19	45	52	16	12	385
アオキ																				1			1
アカガシ亜属	2	75	3		1										14	7			9	4	3	4	122
エノキ属															1	2							3
カエデ属															1								1
カツラ属																					1		1
キハダ属		1								1													2
クスノキ		2								1													3
クヌギ節		7	1													10			1	1			20
クヌギ節かコナラ節		1																					1
クリ					1							3			12	5		1	1	3	1	2	29
クワ属																1			1				2
ケヤキ		1							1	2			1		1				1		1		8
コナラ節						1									2	3					3	1	10
サカキ		1				1							1		4				2	3			12
サクラ属		2								1					2	1						1	7
サワフタギ節															1								1
シイ属															7	2				3	3		15
タラノキ																2			1	2			5
ツツジ属																1							1
ツバキ属		1			3								1			1						1	7
トチノキ											1											1	2
トネリコ属															4	2							6
ニシキギ属									1														1
ハイノキ属															1								1
ハンノキ亜属																4							4
ハンノキ属															1				1				2
ブナ科																				1			1
ミズキ属																1				1	1		3
ムクロジ		1											1							1			3
ムラサキシキブ属																				1			1
モチノキ属										1					1								2
モモ										1											1		2
ヤナギ属													1		1	14				1		1	18
リョウブ															1								1
広葉樹小計	2	92	4		5	2			2	7	1	3	5		54	56		1	17	22	14	11	298
合計	5	98	5	12	6	8	2	6	5	43	28	16	15	6	126	90	3	20	62	74	30	23	683

祭祀・儀礼関連具は、針葉樹27点、広葉樹１点であり、針葉樹が圧倒的に多い。広葉樹１点は朱付き製品（掲載番号6977）で、器種認定が困難な遺物であり、これを除くとすべて針葉樹が選択されたことになる。その内訳はアスナロ属14、ヒノキ・ヒノキ属９であり、両者で大半を占めている。また、NR012においてまとまって出土した斎串10本（図1441）の内訳は、アスナロ属８、ヒノキ属２であった。

葬送具はいずれも弥生時代前期の木棺材である。SZ155の棺材はすべてスギで、底板の下に据えられた３本の棒材のうち、１本はクリであった。SZ156の棺材は底板のみモミ属で、他はスギであり、同一の棺で異なる樹種が選択されていた。

建築部材には、針葉樹と広葉樹のいずれも多用されており、針葉樹がやや多い。このうち、発掘作業時に柱穴内から出土した柱根の樹種は、針葉樹６（アスナロ属２、コウヤマキ１、ヒノキ３）、広葉樹21（アカガシ亜属７、クリ３、コナラ節２、サカキ１、シイ属４、トネリコ属３、リョウブ１）であり、広葉樹が多く、しかもアカガシ亜属が最も多かった。また、扉部材や台輪などの大型材はヒノキなどの針葉樹が多用されているが、掲載番号2659の蹴放のようにアカガシ亜属もわずかに使用されている。一方、焼失家屋であるSB531の炭化材の樹種同定（第６章第７節参照）では、92試料中66試料がクリもしくはその可能性のある材で、アカガシ亜属８、シキミ７、サカキ５がそれに次ぐ。シキミは報告書に図示した木製品には使用されておらず、SB531のみで確認できた樹種である。

土木材は針葉樹と広葉樹のいずれも多用されており、広葉樹がやや多い。土木材は遺跡周辺の身近な材を、材質は重視せずに利用する傾向があるとされ（島地・伊東1988）、今回出土した杭材も丸木芯持材が目立つことから、材質よりも利便性を重視した選択といえる。また、針葉樹と広葉樹が多用されていることから、当遺跡周辺は多種多様な樹木が混成する植生であったといえ、花粉分析結果（第６章第４節参照）とも一致する。

３　起耕・整地具の未製品や素材と製品

今回報告した調査区からは起耕・整地具が77点出土し、そのうち製品は26点、未製品や農具素材は51点である。つまり、後者は前者の約２倍であり、未製品や農具素材の出土量の多さが目立つ。そのため、ここではその出土位置や、出土量の多い直柄平鍬の製材から製品までの製作工程について検討する。

起耕・整地具の未製品や農具素材の出土位置を図2607に示した。当遺跡はこれまで約57,000㎡の発掘調査を実施したが、それらがまとまって出土した遺構はNR002とSD0381（大溝）[1)]の２つの遺構のみであり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が存在する居住域内からの出土はなく、また、NR002とSD0381以外の自然流路や溝状遺構からの出土も少ない。一方、NR002では水流部が湾曲し居住域に最も近い位置からの出土が多く、SD0381ではＢ地区南部とＣ地区中央からの出土が目立つ。未製品や農具素材は、急激な乾燥による狂いやひずみを防ぎ、除々に乾燥をさせつつ、さらに加工を容易にするための「水漬け」処理を行う、とされている（大阪府立弥生文化博物館2012）。出土した遺物には破損等による廃棄物も含まれると考えられるが、このような水漬け処理をする場所は、荒尾南遺跡の事例では、水を得られる場所ならば無作為にどこにでも設置されたという訳ではなく、自然流路や溝状遺構のうち居住域（もしくは木製品加工施設等）との距離や、水域の深さなどに規制され、ある一定の場所（もしくは範囲）が選択されていたと考えられる。

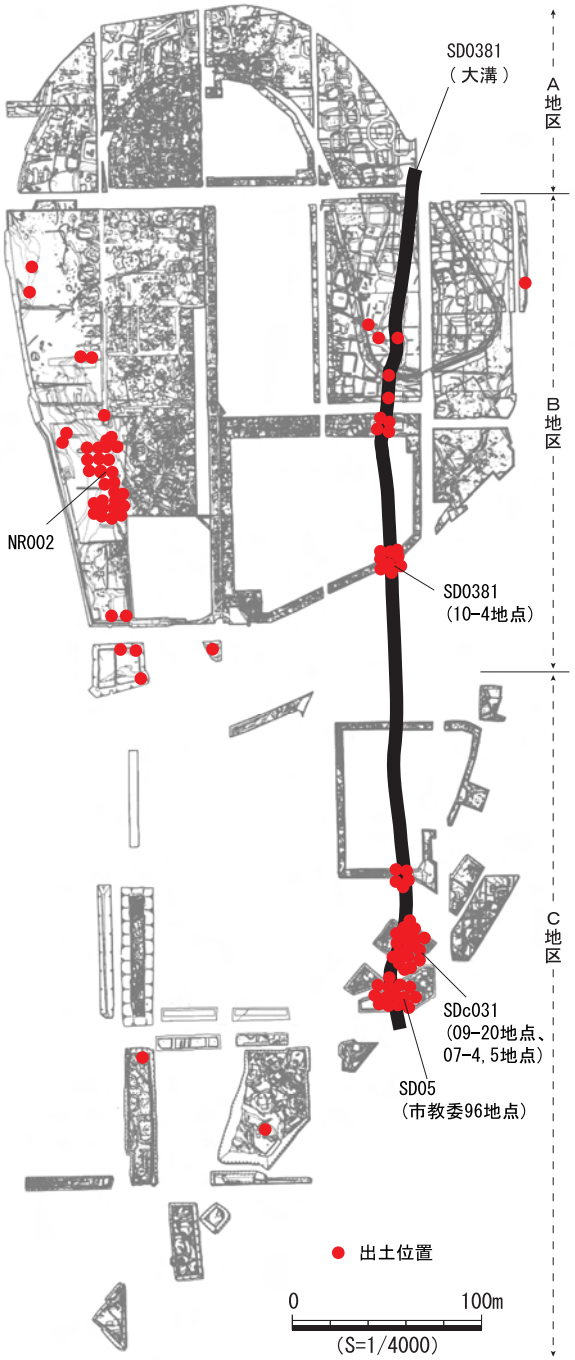


図 2607 起耕・整地具未製品と農具素材の出土位置

また、当遺跡では、過去に泥除の製作工程が推定できる資料が出土した（大垣市教育委員会 2008）。今回の調査では、直柄平鍬の製作工程がある程度判明したので、樋上昇氏の段階設定（樋上 2010）に準拠し、以下に記す。

樋上氏は飯塚武司氏の論考（飯塚 2001）を参考とし、掘削具の製作工程の段階設定を行った。それは、伐採、製材（伐採した原木にクサビを打ち込み、ミカン割り材を採る）、乾燥、加工ⅰ（ミカン割り材を加工して断面が横長の二等辺三角形になる板材にする）、加工ⅱ（板材の中央部にあたる最も厚い部分を加工して着柄のための隆起部を連続した状態につくりだす）、加工ⅲ（長い板材のままで鍬１点ずつの平面形及び隆起部分をつくりだす）、加工ⅳ（鍬１点ずつを切り離す）、加工ⅴ（１点ずつの鍬に穿孔をほどこし、刃部をつける）である。

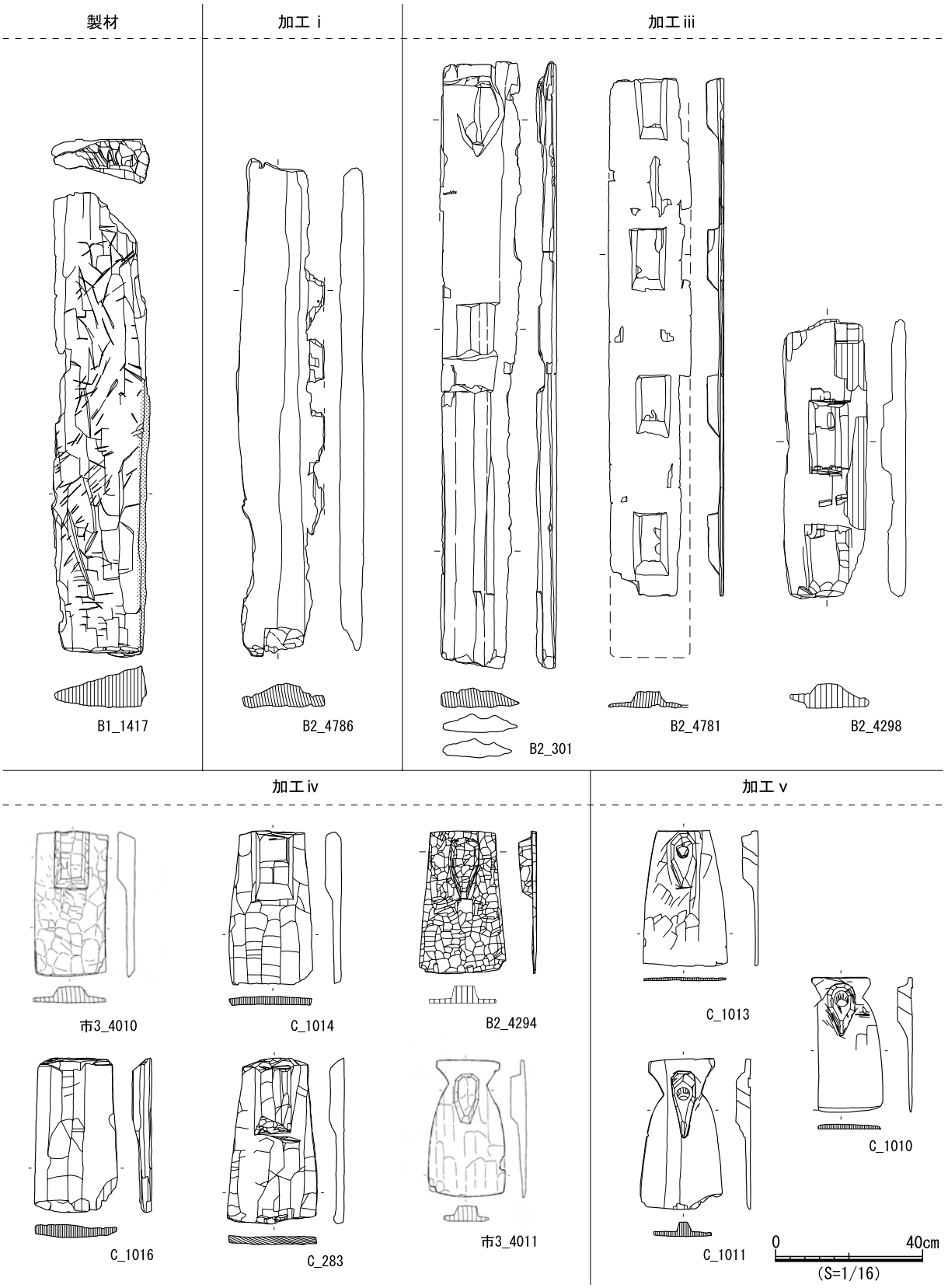
これに、今回出土した遺物を当てはめると、図 2608 のようになる。

製材段階の B1_1417 は、長さ 123.1 ㎝、幅 26.0 ㎝であり、木材中心までの距離を約 10 ㎝と仮定すると、直径約 70 ㎝の丸太材であったことになる。樹皮が残存するミカン割り材で、裏面にクサビ痕が残る[2)]。なお、SK01894 下層からは長さ約 7.3 ｍ、直径約 70 ㎝のアカガシ亜属（イチイガシ）の倒木が出土しており（第４章第１節及び第６章第７節参照）、NR001 でも長さ約 10 ｍ、直径約 60 ㎝のアカガシ亜属の倒木が出土している（岐阜県文化財保護センター 2012b）ことから、当遺跡周辺に素材となる大径木が存在していたことがわかる。

加工ⅰ段階の B2_4786 は、長さ 133.0 ㎝、幅 25.0 ㎝であり、断面形は横長の二等辺三角形状である。腐食や欠失が著しく、表面の加工状況は不明である。

加工ⅱ段階に該当する資料の出土は確認できていない。

加工ⅲ段階の B2_301 は、長さ 164.0 ㎝、幅 20.0 ㎝であり、下方約半分の断面形は横長の二等辺三角形状で、中央に材の長辺に直交する溝が削り込まれている。また、その上に方形の隆起、上端に不整形の隆起があり、加工ⅰ段階から加工ⅲ段階へと移行する途中の未製品と考えられる。また、B2_4781、



※遺物番号のうち、アンダーバーの前の文字は報告書名を示し、後ろの数字は各報告書の掲載番号を示す。
報告書名は、B1：荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅰ（岐阜県文化財保護センター2012b）、B2：荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅱ（本報告書）、C：荒尾南遺跡Ｃ地区（岐阜県文化財保護センター2014）、市3：荒尾南遺跡Ⅲ（大垣市教育委員会2008）である。

図2608　直柄平鍬の製材から製品への製作工程

B2_4298はいずれも連続する着柄隆起を有する未製品である。B2_4781は四連で、長さ138.0㎝、幅20.0㎝で、欠損部を復元すると長さ約157㎝と考えられる。着柄隆起は長方形で、身は薄く、鍬１点ずつの平面形は作出されていない。B2_4298は上端が欠損し、下端は二次加工が施されているため、全形は不明である。着柄隆起は長方形であり、身は厚く、着柄隆起が向かい合っている点がB2_4781と大きく異なる点である。

加工ⅳ段階のものは最も多く出土し、そのうち６点を例示した。左列上（市3_4010）の全形は長方形で、加工ⅲ段階のB2_4781から鍬１点ずつを切り離した形態に類似する。中央列（C_1014、C_283）は上部幅を減じ、全形が台形状で、着柄隆起は長方形である。右列（B2_4294、市3_4011）は着柄隆起が舟形となり、身が薄い。型式学的には、左列→中央列→右列へと形態変化し、右列はB2_4294よりも頭部左右のくびれがある市3_4011が型式学的に後出する。しかし、B2_4294→C_1013への変化も考えられることや、長板素材複数製作（いわゆる連作）のみならず、短板素材単数製作（いわゆる単作）の場合も想定すべきであり、製作工程は一元的ではなかったといえよう[3)]。

加工ⅴ段階は穿孔が施された段階で、製品も含めた。荒尾南遺跡の資料では、柄孔は着柄隆起を舟形に整形した後に穿っている。C_1013は頭部左右のくびれと蟻溝がなく、刃部には約５㎜の面が残ったままである。また、柄孔の直径が小さく、背面（隆起のある面）よりも前面の直径が小さいことから、穿孔途中の段階と考えられる。また、C_1011は刃部に磨滅が認められず、柄孔隆起の整形が粗い。一方、C_1010は刃部に磨滅が認められることから製品の可能性が高く、C_1013とC_1010を図面上で重ねると、頭部左右のくびれ以外の全形と柄孔隆起がほぼ重なるため、C_1013→C_1010への変化が推定できる。このように、当遺跡の加工ⅳ段階からⅴ段階の資料では、およそ着柄隆起の舟形整形→柄孔の穿孔→蟻溝切削→刃部整形の順で作業を行い、完成に至っていることがわかる。

なお、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて、当遺跡周辺の丘陵地にはアカガシ亜属やシイノキ属からなる照葉樹林やスギ林を主体とした森林が広がっていたとされる（第６章第４節参照）。これと今回の分析結果や、大垣市教育委員会の調査結果などから、当遺跡及びその周辺において、樹木の伐採や製材から木製品の製作までを行っていたことは、ほぼ間違いないと考えられる。また、図2608に示したように、加工ⅳ～ⅴ段階の資料の多くはＣ地区のSD0381出土資料であり、製材から加工ⅲ段階までの大型材はＢ地区の自然流路からの出土が多い。そのため、直柄平鍬に限定すると、自然流路とSD0381とでは未製品の加工段階が異なるものが多く出土しているといえ、ある程度は製作工程により加工する場所が決められていたと考えられる[4)]。

注

1)　Ｂ地区でSD0381（大溝）とした遺構は、Ｃ地区でSDc031、市教育委員会調査区でSD05と呼称されている。ここでは、それらをまとめてSD0381として記載する。

2)　B1_1417は全体の歪みが著しく、製材後に農具としての利用が困難であったため、作業台に転用された可能性があると、山田昌久氏から御教示を得た。

3)　農具素材には長さ１ｍ以上の長大なものや、50㎝未満の短いものもある。そのため、すべての直柄平鍬が連作により製作された訳ではなく、単作の場合もあったと考えられる。また、アカガシ亜属は建築部材にも多く使用されていることから、場合によっては、素材の調達は建築部材からの転用も想定すべきかもしれない。

4)　荒尾南遺跡Ｃ地区の報告書（岐阜県文化財保護センター2014）では、「大溝の岸部が木材二次加工及び廃棄の場であった」としている。

第７節　金属製品

荒尾南遺跡出土の金属製品を、過去の調査（大垣市教育委員会調査を含む）による出土品も含めて合計すると、出土金属製品133点のうちⅤ～Ⅸ期（弥生時代後期～古墳時代前期）のものが52点と約39％であり、その他金属製品は銭貨や煙管など、中近世以降の資料が半数以上を占める。当遺跡ではⅤ～Ⅸ期の遺構を中心に金属製品が出土していることから、ここではその主な金属製品をまとめ、当遺跡でみられる金属製品の特徴について考えたい。

１　主な金属製品の分布と組成

第３章「遺物の概要」でも述べたように、表579をみると、Ⅴ～Ⅸ期に属する可能性がある銅鏃が29点であり、Ａ～Ｃ地区（図2609・図2610参照）全域において銅鏃の比率が高いことが分かる。ま

表579　荒尾南遺跡出土のⅤ期～Ⅸ期金属製品一覧

器種名 ／ 地区名・遺構種別・遺構名（遺構時期）		倭鏡	銅鐸片	巴形銅器	円盤状銅製品	銅鏃	鉄斧	鋤先	鑿	鑿	釘	銅板	不明鉄製品
A地区						4							
B地区		2	1			17		1		1	3	1	1
C地区				1	1	8	1		1				2
小計		2	1	1	1	29	1	1	1	1	3	1	3
SA，SB，SP，SH						5							
SZ						1		1					
SD		1		1	1	3							
SK						3							1
ST													
NR										1			
遺物包含層など		1	1			17	1		1		3	1	2
小計		2	1	1	1	29	1	1	1	1	3	1	3
A地区Ⅰ	SK00693（古墳～）					1							
B地区Ⅰ	SZ060（Ⅲ）							1					
	SD0381（Ⅵ～Ⅶ）												1
	SD0653（Ⅴ～Ⅵ）					1							
	SK01872（Ⅶ～）					1							
B地区Ⅱ	SB265（Ⅶ）					1							
	SB271（Ⅶ）					1							
	SB378（Ⅵ）					1							
	SB524（Ⅶ）					1							
	SB555（Ⅵ～Ⅷ）					1							
	NR002（縄文晩期～Ⅸ）								1				
	SD0381（Ⅵ～Ⅶ）	1											
	SD1041（Ⅶ～）					1							
	SK04913（Ⅶ）					1							
C地区	SZ040周溝（Ⅵ）					1							
	SDc031南部（Ⅶ～Ⅸ）			1	1								
	SD05　大垣市調査（弥生時代中期末～古墳時代初頭）					1							
Ａ～Ｃ地区遺物包含層		1	1			17	1			1	3	1	2
小計		2	1	1	1	29	1	1	1	1	3	1	3

※C地区の銅鏃は大垣市教育委員会調査による5点を含む

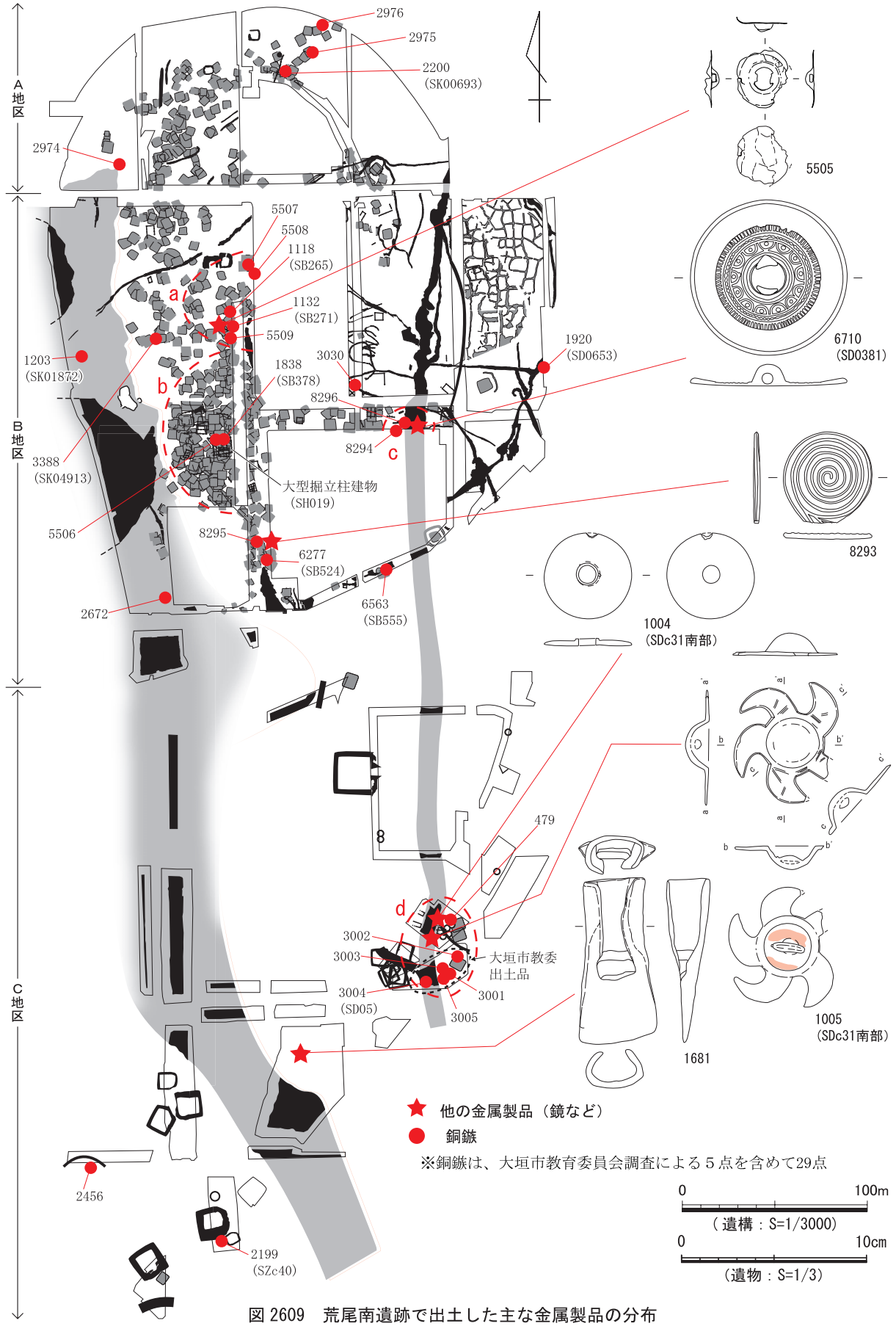


図 2609　荒尾南遺跡で出土した主な金属製品の分布

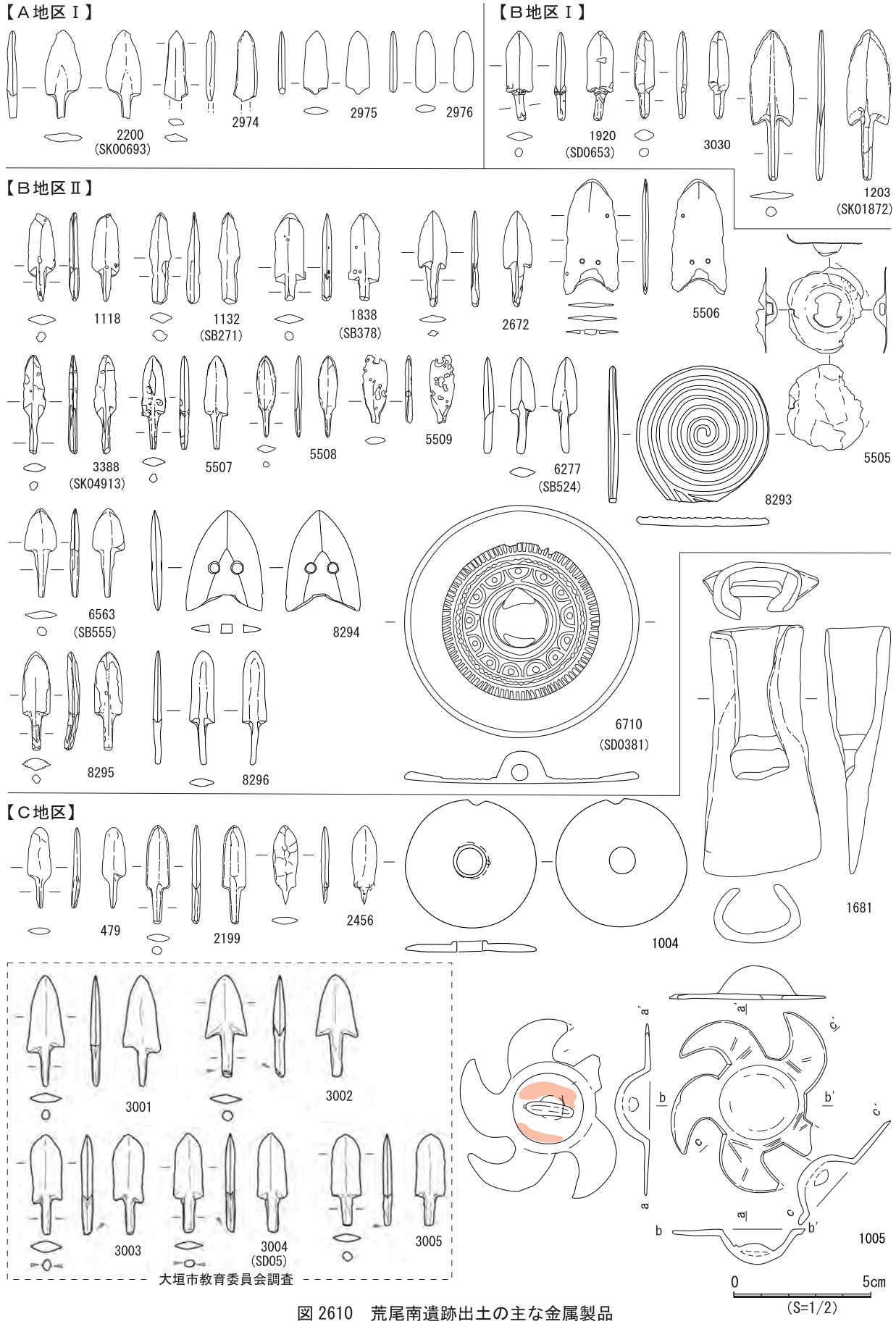


図 2610　荒尾南遺跡出土の主な金属製品

た、Ｂ地区とＣ地区では器種がやや多様になり、銅鏡（倭鏡２)）、銅鐸片、円盤状銅製品、巴形銅器などの特殊な青銅製品が出土している。遺構種別をみると、建物関連の遺構（SA、SB、SP、SH）と溝状遺構からの出土量がやや目立つが、建物関連の遺構から出土した銅鏃５点はすべて竪穴住居跡からの出土である。また溝状遺構からは比較的多様な器種が出土しており、中でも大溝(SD0381)からはＢ地区においては銅鏡（6710）が、Ｃ地区においては円盤状銅製品（1004）や巴形銅器（1005）が出土するなど注目すべき資料が認められる。

次に、これらの主な金属製品の時期やその分布について検討したい。冒頭で述べたとおり、主な金属製品はⅤ～Ⅸ期のものとみられるが、竪穴住居跡から出土した銅鏃に着目すると、共伴土器の時期から銅鏃の時期や分布の特徴がつかみやすいと考えた。表579の網掛けの行をみると、竪穴住居跡（SB）出土の銅鏃はすべてⅤ～Ⅷ期の住居跡から出土しており、そのうちⅦ期からの出土がもっとも多い。また、遺物包含層から出土した銅鏃も、図2609をみるとその多くが建物関連の遺構分布と重なっていることが分かり、遺構分布と関係する可能性は高いと考えられよう。もちろん、遺構の重複による混入を考慮しつつ、銅鏃の所属時期については慎重に検討する必要がある。そのため、ここでは銅鏃29点がⅤ～Ⅷ期に属する可能性のみ指摘しておくこととする。

では、なぜこのような分布状況がみられるのだろうか。その分布状況について、もっとも出土量が多い銅鏃とそれ以外の金属製品とに分けて分析したい。

図2609の主な金属製品の分布をみると、銅鏃が比較的多くまたは集中して分布するのはＡ地区の北東部、Ｂ地区の中央部と大溝周辺、そしてＣ地区の大溝周辺である。特にＢ地区北部のSB265、SB271周辺とＢ地区中央部の遺構密集域とを比較すると、SB265、SB271周辺は遺構数に対して銅鏃の分布範囲は広く、遺物包含層出土の銅鏃も含めると５点の出土がみられる。それに対して、Ｂ地区中央部の遺構密集域においては銅鏃が２点（1838、5506）となることは特徴的であろう。その銅鏃２点についてさらに着目すると、竪穴住居跡が環状に密集する区域のほぼ中央部、大型の掘立柱建物跡（SH019）付近で隣接するかのように分布している。第７節第４章で述べた砥石の分布（図2600下）と比較すると、砥石は中央部を除いたその周辺に分布するのに対して、この２点は中央部にしか分布していない。第７章第２節では、SH019がⅦ期の集落内における中心的な施設であった可能性を指摘していることから、この銅鏃２点の分布との関連性が気になるところである。ただし、1838はⅥ期の竪穴住居跡から、5506は遺物包含層からの出土であることから、層位的にその関連性を検証することは困難である。あくまで平面的な分布からSH019と銅鏃の分布との関連性については可能性として考えておき、ここでは事実報告に留めておきたい。

表579をみると、銅鏃以外の主な金属製品の多くは大溝(SD0381)、方形周溝墓、土坑から出土している。遺物包含層から出土した倭鏡（5505）はⅣ層から、銅鐸片（8293）はⅠb層からといったように、層位的には違いが見られるものの、図2609をみる限り、平面的な分布状況は遺構密集域に限られ、いずれも銅鏃と近い位置に分布している。Ｂ地区南部から、Ｃ地区にかけて調査区に空白地区があるものの、現状では、主な金属製品の分布と遺構密集域が重なることから、これら金属製品と遺構密集域にある遺構とが何らかの関連をもつ可能性がある。

２　荒尾南遺跡で出土した青銅製品の検討課題

Ｃ地区の報告書（岐阜県文化財保護センター2014）においては、青銅製品の蛍光Ｘ線分析結果から、

濃尾平野部で出土する銅鏃の特徴や、円盤状銅製品のインゴットの可能性を取り上げて、青銅製品の検討課題を指摘した。そこで、今回の報告ではＢ地区における銅鏡や銅鐸片の出土がもつ意味についての検討課題を明らかにしたい。

表580　岐阜県内で出土した弥生時代の銅鏡一覧

銅鏡の名称	種類	出土地	遺跡名	時期	備考
内行花文鏡	舶載鏡	岐阜市	瑞龍寺山山頂遺跡	弥生時代後期	径22.1cm。 墳墓から出土。
内行花文鏡	舶載鏡	関市	大杉遺跡	弥生時代後期	復元径 約12cm。 遺物包含層から出土。
方格規矩四神鏡	舶載鏡	関市	砂行遺跡	弥生時代終わり頃	小破片。 住居跡から出土。
重圏文鏡	倭鏡	美濃市	美濃観音寺山古墳	弥生時代終わり頃～ 古墳時代初め頃	径9.5cm。 墳墓から出土。
方格規矩四神鏡	舶載鏡	美濃市	美濃観音寺山古墳	弥生時代終わり頃～ 古墳時代初め頃	径23.6cm。 墳墓から出土。
重圏文鏡	倭鏡	大垣市	荒尾南遺跡	弥生時代終わり頃～ 古墳時代初め頃	径8.5cm。 溝状遺構から出土。
重圏文鏡	倭鏡	大垣市	荒尾南遺跡	弥生時代終わり頃～ 古墳時代初め頃	径3.1cm。 遺物包含層から出土。

表580でみると、岐阜県内において製作時期が弥生時代にまで遡る可能性のある銅鏡８面[3)]のうち、当遺跡は２面が出土している。また、全国における重圏文鏡の出土例は当遺跡を含めて54例を数え、そのうち弥生小型仿製鏡の重圏文鏡は７例と、全国的にみても極めて希少なものであることがわかる。その分布は西日本に多く、当遺跡での出土は西日本の東端での出土例であることは特筆すべきことである[4)]。また、銅鐸についても、表581のとおり県内では７例目であり、遺物包含層出土の事例ではあるが、弥生時代を代表する青銅製品の一つである銅鐸が破片の状態で出土した事例としては県内初である[5)]。このような希少価値の高いものを所有できる有力者が存在したか否かの検討は議論されるべき点であろうが、ここでは事実報告に留めておき、遺構から出土した倭鏡（6710）に着目したい。

表581　岐阜県内で出土した銅鐸一覧

名称	出土地	出土年
上加納銅鐸	岐阜市上加納篠ヶ谷	享保年間
久々利銅鐸	可児市久々利（大字柿下字番場）	享保18年３月
十六銅鐸	大垣市十六町字中林	明治34年４月
上呂銅鐸（１号）	下呂市萩原町大字上呂	昭和７年11月
上呂銅鐸（２号）	下呂市萩原町大字上呂	昭和７年11月
切通銅鐸	長森切通	昭和43年～55年？
荒尾南銅鐸	大垣市荒尾町	平成18年

※『大垣市史　考古編』（平成23年3月25日）を一部改変

6710は、円形の珠文と弧文をいつくも重ねた文様が非常に特殊であるが、複数の圏線を重ねることから「重圏文鏡」に分類できる。しかし、古墳時代の重圏文鏡よりも文様が複雑である点から、美濃観音寺古墳出土の重圏文鏡と同様、重圏文鏡の祖形である可能性が指摘できる[6)]。また、一般的にみられる重圏文鏡は古墳からの出土例が多いが、6710は、大溝（SD0381）の岸辺において、鏡の鏡面を上にした状態で出土した。鏡背面にもベンガラを塗った痕跡が認められ、祭祀用具として使用されたものである可能性が考えられる。さらに、付近のほぼ同じ層からは桃核や非実用的な手捏ね土器と

いった祭祀用とみられる遺物も出土している。このように、特殊な文様や出土状況から、祭祀用具として倭鏡を使用し、使用後に大溝へ廃棄するといった「水辺の祭祀[7)]」の事例と類似する。さらに、第７章第２節でも述べたように、独立棟持柱建物であるSH027から大溝の東岸までの一帯を、Ⅶ期段階の一つの祭祀空間ととらえるならば、6710が祭りの後に大溝へ運ばれた可能性は指摘できよう[8)]。また、「水辺の祭祀」の可能性を検証する一つの材料として、倭鏡（6710）の時期に着目したい。6710は弥生時代後期から古墳時代前期（Ⅵ～Ⅶ期）の土器を包含する大溝埋土から出土しており、その出土状況からⅥ～Ⅶ期のものと考えられる。しかし、6710が鋳造され使用された期間を考慮するならば、6710が製作された時期はⅤ期まで遡る可能性があり、その場合は愛知県大口町の余野遺跡出土の倭鏡とともに東海地方最古級の倭鏡である可能性も考えられる[9)]。

以上のように、当遺跡で出土した倭鏡がもつ特徴から、製作時期、使用時期、祭祀空間の存在、廃棄行為の有り様など、あらゆる可能性を指摘できようが、今後の出土例の増加に期待し検討課題としておきたい。

注

1)　大垣市教育委員会2008『荒尾南遺跡』Ⅲ（大垣市埋蔵文化財調査報告書第18集）
2)　車崎正彦2002「中国鏡と倭鏡」『考古資料大観　第５巻　弥生・古墳時代　鏡』小学館
3)　伝世後に古墳に副葬したものを除く。
4)　国立歴史民俗博物館編1994『共同研究「日本出土鏡データ集成」２　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』（国立歴史民族博物館研究報告第56集）、大手前大学史学研究所『弥生・古墳時代銅鏡出土状況資料集　日本考古学協会2010年度兵庫大会第２分科会「古墳出現過程と銅鏡」資料集』、岐阜県教育委員会・財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『岐阜県新発見考古速報2006－平成18年度岐阜県発掘調査報告会－』
5)　大垣市2011『大垣市史　考古編』
6)　森下章司氏のご教示による。
7)　6)に同じ。
8)　赤塚次郎氏のご教示による。
9)　6)に同じ。

第８節　遺跡の変遷

本節では、発掘調査によって明らかとなった、地形・景観、居住域、墓域、生産・栽培、交流・交易の６項目について、縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中期以降の４時期に分けて概観する。

１　縄文時代晩期～弥生時代前期（Ⅰ期）（図2611）

地形・景観　Ａ・Ｂ地区の西側では縄文時代晩期前葉から中葉にかけて自然流路の形成と埋没が活発に起こり、東側でも自然流路が形成され、調査区中央付近の旧中洲上まで洪水が及んだ。Ｃ地区では縄文時代後期後葉前後に後背湿地が発達し、後期末から晩期初頭に洪水による堆積が始まった。縄文時代晩期後半になると人々の活動の痕跡が確認でき、遺跡西側から南半部の中央を流れるNR001、NR002、NRc01などで堆積が始まった。NR001やSK01894では直径約60～70㎝の倒木が出土していることから、遺跡周辺に大径木のある森林が存在し、その中に河川が流れ、河川沿いに集落が展開している景観であったと考えられる。

居住域　Ａ・Ｂ地区の西側では縄文時代晩期の竪穴住居跡３軒（Ａ地区１、Ｂ地区２）を検出し、いずれも掘形は検出できなかったが、直径約3.5～4.5ｍの範囲に環状に小穴が並ぶ状況を確認した。弥生時代前期の建物跡は未検出であるが、多量の遺物が主に自然流路の砂礫層から出土していることや墓域を検出したことなどから、遺跡周辺に当該期の集落の存在が想定できる。

墓域　方形周溝墓10基（Ｂ地区10）、土器棺墓３基（Ａ地区１、Ｂ地区２）、木棺墓９基（Ｂ地区９）、土坑墓５基（Ｂ地区１、Ｃ地区４）を検出した[1)]。方形周溝墓はいずれも弥生時代前期に属する。Ｂ地区中央から西側にかけて分布し、小型で不整形を呈するものが多い。土器棺墓は縄文時代晩期のSZ114（Ａ地区）、弥生時代前期のSZ177、193（Ｂ地区）であり、SZ114は横位の単棺と考えられている。木棺墓はＢ地区南西側に分布し、棺の形態はいずれも組合せ式箱形木棺のⅠ型木棺（福永1987）である。棺材が残るSZ155、156は弥生時代前期に属し、他は縄文時代晩期～弥生時代前期の時期幅で捉えている。このうち、SZ156からは管玉３個と水銀朱が出土した。

生産・栽培　SK04945から陣笠型の泥除未製品３個体が出土しており、当該期から小規模ではあるが木製品生産を行っていたと考えられる。なお、農耕に関わる遺構は確認できなかった。

交流・交易　SK01894では北陸地方の下野式に類似する浮線文系土器（B1_1268）[2)]が出土した。また、同遺構からは台式土偶（B2_81）や緑色片岩の石棒２点（B1_1370、B2_82）と石核（B2_83）が出土した（写真32）。緑色片岩の産出地はこれまで当遺跡周辺では未確認で、現状では三波川変成帯などが知られており（長田2013）、出土した石材の産地同定などが今後の課題である。また、Ｂ地区南西部に位置するNR014～017では、弥生時代前期の遠賀川系土器、亜流遠賀川系土器、条痕文系土器などが多数出土し、特に遠賀川系土器の比率が高い。その他として、下呂石製の打製石鏃（B2_2658など）、

写真32　SK01894出土遺物
（左：石棒、右：石核）

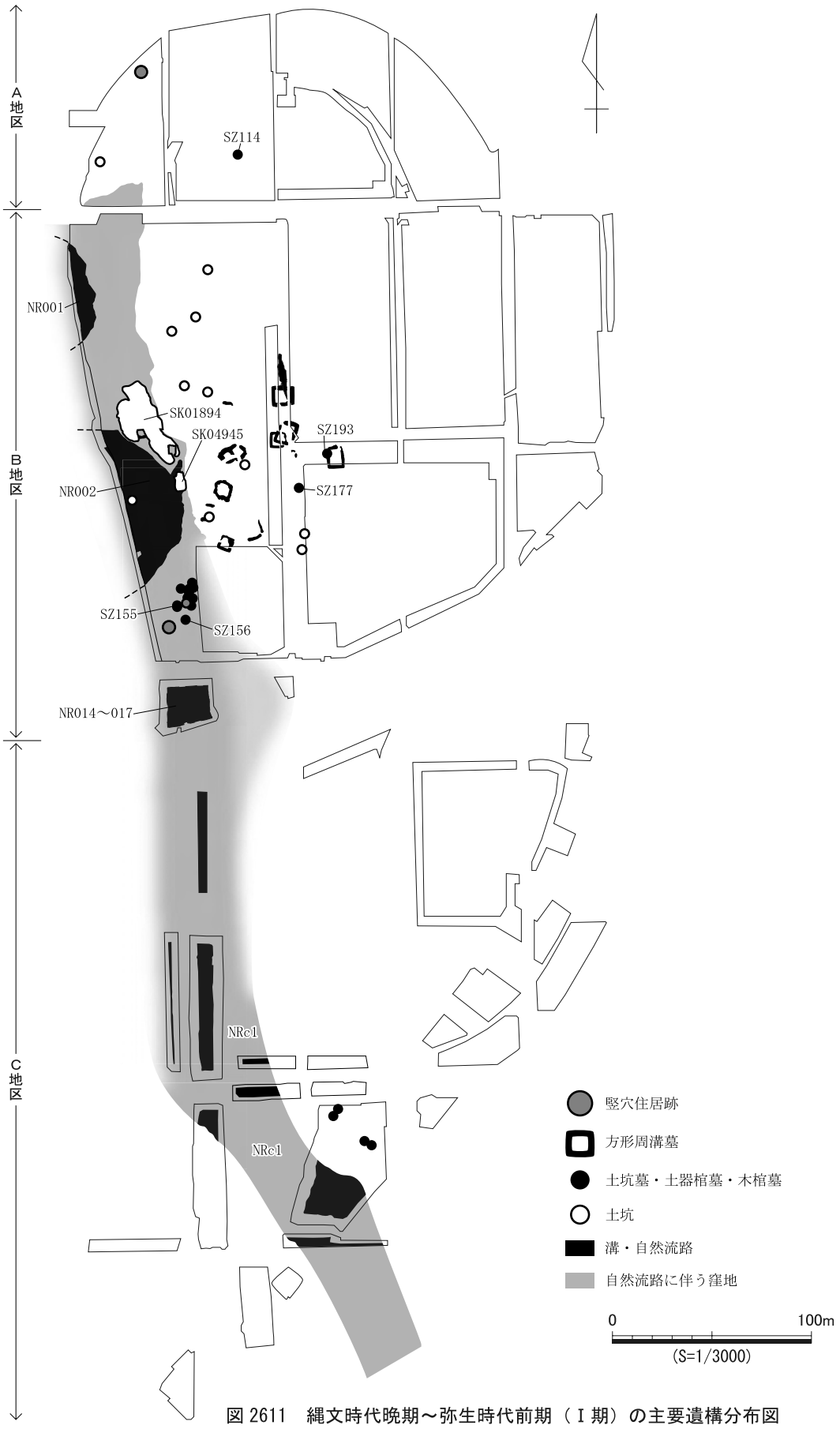


図 2611　縄文時代晩期～弥生時代前期（Ⅰ期）の主要遺構分布図

ヒスイ製の石製品（B2_8292）、時期は不明であるが珪化木製の石製品（A2_980）などが出土した。珪化木は岐阜県美濃加茂市周辺や三重県いなべ市などで産出するとされている（岐阜県博物館2013）。

小結　縄文時代晩期の遺構数は少ないが、当地を居住地として最初に選択した人々は豊富な森林を開拓し、自然流路の周辺で生活を営んだと考えられる。弥生時代前期になると、墓制や土器など日常的な習俗に外来の要素を認めることができる。この頃、近畿地方の木棺形態は福永分類のⅠ型木棺が主体で、中期になると漸移的にⅡ型に変化する[3)]。東海地方ではこれまで弥生時代前期の木棺墓の検出はほとんどないこと[4)]や、滋賀県上出Ａ遺跡などで縄文時代晩期から弥生時代前期の木棺墓が検出され、木棺形態はⅠ型であること（滋賀県教育委員会2001）などから、現状では当遺跡の木棺墓の導入については畿内など西日本からの影響を想定すべきであろう。また、西日本に広く分布する遠賀川系土器の当遺跡における出土量は、岐阜県内において突出している。これらは、弥生文化の東進の流れの中で理解できよう。

２　弥生時代中期（Ⅱ期～Ⅳ期）（図2612）

地形・景観　Ａ・Ｂ地区の旧中洲上とＣ地区の自然堤防は引き続き環境が安定しており、遺跡東側には南北に縦走する幅約10ｍの大溝が掘削され、多数の方形周溝墓が造営された。一方、自然流路は堆積が進行し、前代のＢ地区における竪穴住居跡や木棺墓群は埋没し、Ｂ地区南西側では自然流路の埋土上面から方形周溝墓が構築されている。なお、前代に比べて、土地の開拓が東側や南側へと拡大し、遺跡全体で人々の活動の痕跡を確認した。

居住域　明確な建物跡は確認できなかった[5)]。

墓域　方形周溝墓227基（Ａ地区76基、Ｂ地区116基、Ｃ地区41基[6)]）、円形周溝墓１基（Ｂ地区１）を検出した。遺構の粗密はあるものの南北約640ｍの範囲内に分布しており、広大な墓域といえる。Ｂ地区中央付近から北側は自然流路に伴う窪地から大溝までの間の旧中州上に構築されており、大溝の西側では２列の方形周溝墓列を検出した。方形周溝墓列中には、円形周溝墓としたSZ045も含まれる[7)]。現状で確認できる方形周溝墓列の南端はＢ地区中央付近までであり、そこから南側には大溝の東側にも方形周溝墓が造営されている。Ｃ地区では墳丘盛土が残存している方形周溝墓を数基確認し、墳丘盛土と主体部との関係や構築方法が明らかとなった。なお、中期段階の方形周溝墓のうち、一辺の長さが判明している墓のうち最大のものはＡ地区西側に位置するSZ004である。また、方形周溝墓以外では土器棺墓１基（Ｃ地区１）、土坑墓16基（Ｂ地区１、Ｃ地区15）を検出した。これらはＣ地区において、自然流路の両岸で方形周溝墓に隣接して群として存在する。

生産・栽培　中期前葉（Ⅱ期）において、Ｃ地区の07_1、08_13、09_15地点では剥片、砥石、石鋸などの石製品製作に関わる遺物が多量に出土しており、石製品製作に関わる場所であった可能性が指摘されている。また、ベンガラが付着した石杵や赤鉄鉱も出土し、その東側の自然流路の埋土からベンガラを検出したことから、ベンガラに関する生産活動の可能性や、石製品の製作に伴う研磨剤の可能性が指摘されている。しかし、中期中葉から後葉（Ⅲ～Ⅳ期）には、このような生業関係の痕跡を確認できておらず、短期間の活動であったと考えられる。なお、同地点では弥生時代中期頃と考えられる28点以上の鉄鉱石（約300g）が出土した。いずれも製鉄工程を経ていない鉄鉱石であり、方形周溝墓からの出土であることや、鍛冶関連遺構や鉄滓・鍛造剥片等を確認できなかったことなどからも、鍛冶とは異なる性格の遺物の可能性がある。

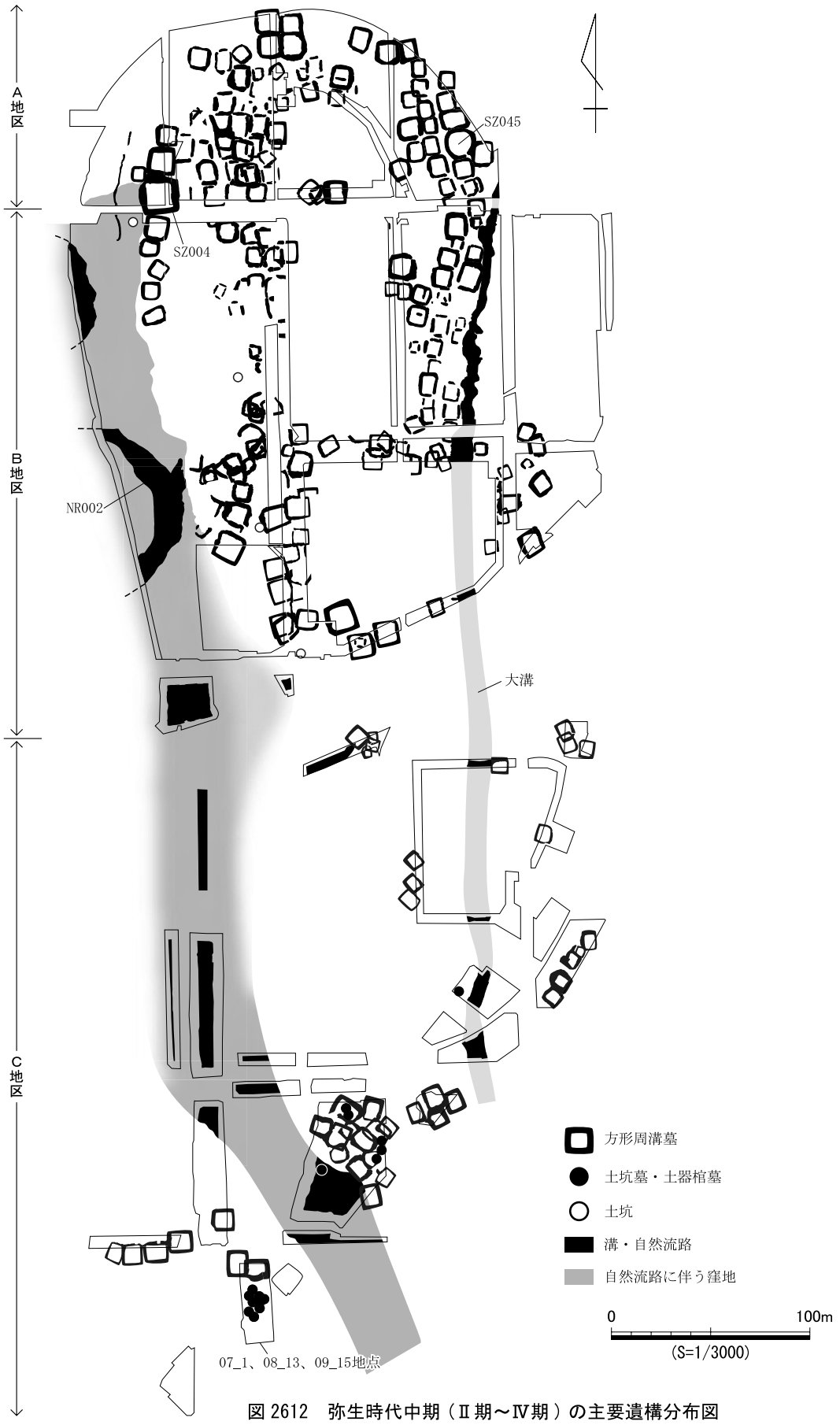


図 2612　弥生時代中期（Ⅱ期～Ⅳ期）の主要遺構分布図

交流・交易　愛知県三河地方の古井式土器（B2_628など）が数個体出土している。また、Ｂ地区西側における３基の方形周溝墓の周溝から石灰岩が出土し、現状では遺跡から北へ約３㎞離れた金生山から搬入された可能性が指摘できる。また、Ａ地区東側における２基の方形周溝墓上の土坑からは、サヌカイト製の石剣（A1_2326）や石核（A1_2330）が出土した。その他として、ハイアロクラスタイト製の磨製石斧（A1_546など）や、紅廉石片岩製の石鋸（C_2090など）が出土している。

小結　弥生時代中期には大溝が掘削され、広大な墓域も造営された。また、Ｃ地区では生産活動の痕跡も確認した。しかし、これまでの発掘調査区域内において当該期の建物跡は未確認であり、周辺にこれらの活動の担い手となった人々の集落が存在していたと考えられる。また、広大な墓域は複数の集落による共同墓地であった可能性があり、それらの解明が今後の課題である。

３　弥生時代後期～古墳時代前期（Ⅴ期～Ⅸ期）（図2613）

地形・景観　Ａ・Ｂ地区の旧中洲上とＣ地区の自然堤防は引き続き環境が安定しており、多数の建物が構築された。遺跡東側にある大溝の北半部は弥生時代後期頃に埋没し、その後再掘削されている。また、Ａ・Ｂ・Ｃ地区の自然流路はシルトの堆積が進行し、湿地化して泥炭が生成された。

居住域　竪穴住居跡559軒（Ａ地区154[8]、Ｂ地区400、Ｃ地区５）、掘立柱建物跡30棟（Ａ地区４、Ｂ地区22、Ｃ地区４）を検出した。これらはＡ・Ｂ地区の自然流路に伴う窪地から大溝までの間の旧中州上に多く構築されており、特にＢ地区中央付近の密集度が高く、その中央付近では大型掘立柱建物跡や壁立建物を検出した。一方、Ｂ地区の大溝東側とＣ地区においては散在している。竪穴住居跡はⅤ期からⅨ期まで存続し、Ⅴ－２期頃から構築されたと考えられる。居住域内にはＡ地区からＢ地区にかけてのびるSD0382、0433、0943を検出し、Ｂ地区南西側ではNR002からのびるSD1019、1047を検出した。これらの溝状遺構の掘削時期は竪穴住居跡が増加するⅤ期からⅥ－１期頃と考えられ、NR002を挟んでおよそ直角気味の配置となるが、その性格は不明である。また、Ｂ地区東側の居住域からやや離れた場所には弧状に巡るSD0490、0664を検出し、Ｃ地区南西側でも同様のSDc158、159、162を検出した。Ｃ地区では検出状況から短期間の祭祀儀礼に伴う可能性が指摘されている。

墓域　方形周溝墓20基（Ａ地区２、Ｂ地区３、Ｃ地区15）、前方後方形周溝墓１基（Ｃ地区１）、木棺墓１基（Ｃ地区１）、土坑墓10基（Ａ地区１、Ｂ地区１、Ｃ地区８）を検出した。Ａ・Ｂ地区の方形周溝墓は規模が小さいのに対し、Ｃ地区のものは大きい。特にSZc40は周溝の上端長軸長が20ｍを超え、方台部の盛土高が1.5ｍ以上あり、突出した規模である。また、Ｃ地区の方形周溝墓は大溝西側では複数基が重複するのに対し、自然流路西側では重複が認められない。前方後方形周溝墓（SZc05）は、Ｃ地区におけるⅤ層上面で最も標高の高い場所に位置している。木棺墓（SZc37）は単基であり、形態は組合せ式箱形木棺で、その底板は転用材である。

生産・栽培　Ｂ地区の大溝東側にて水田域を検出した。いわゆる小区画水田であり、その周囲に給排水に利用したと考えられる溝状遺構が巡る。また、Ｂ地区西側の自然流路やＢ・Ｃ地区の大溝からは木製品の原材や農具素材、未製品などが出土した。Ｃ地区（07_4・5地点、09_20地点）では、大溝の岸辺から砥石や叩石の集積が認められ、建物遺構を複数検出したことから、これらの建物群が木製品製作に関わる可能性が指摘されている。また、当遺跡では銅鏃29点の他に、珠文と弧文を連ねる独特の文様をもつ倭鏡（B2_6710）、巴形銅器（C_1005）、銅鐸片（B2_8293）など多様な青銅器が出土

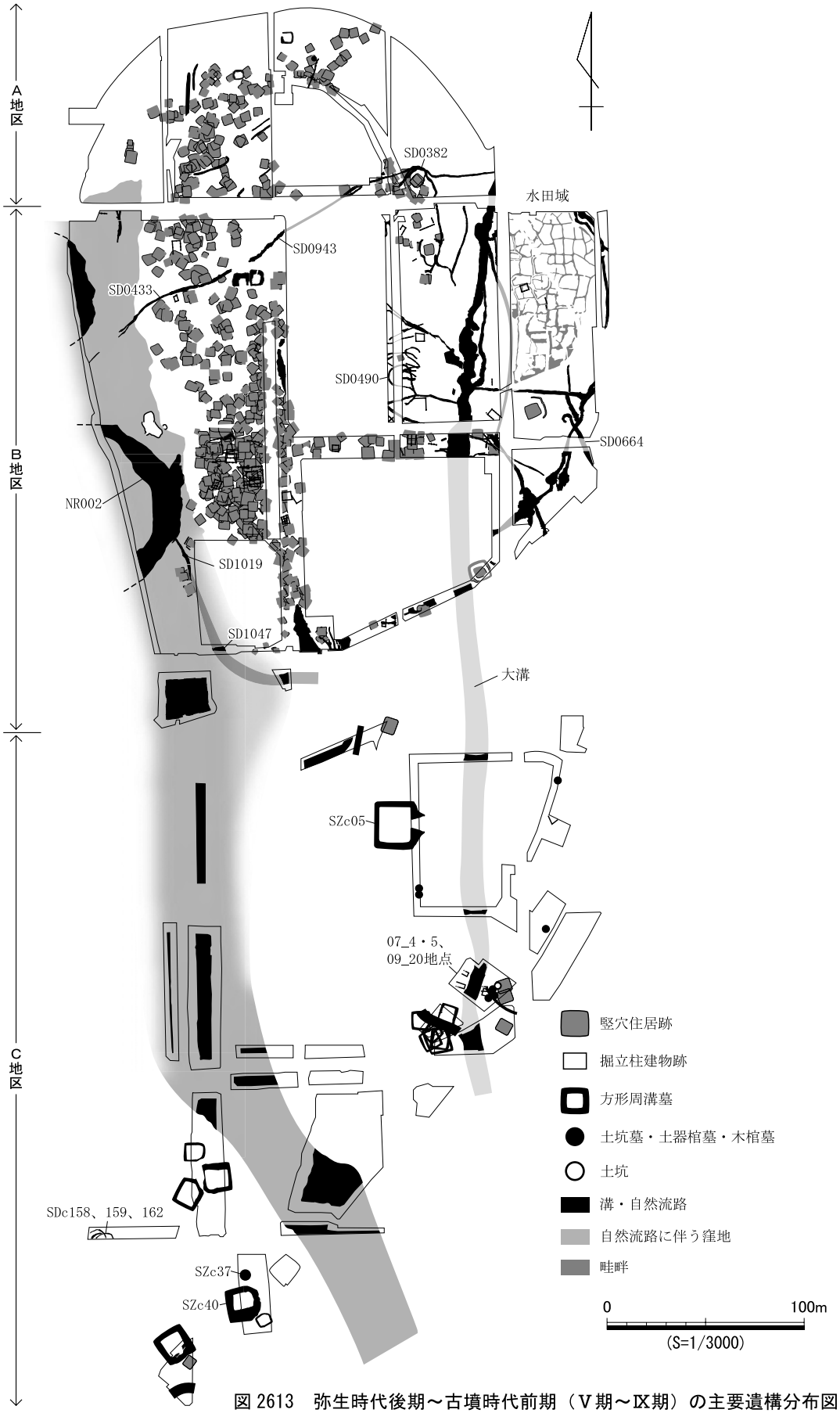


図 2613　弥生時代後期～古墳時代前期（Ⅴ期～Ⅸ期）の主要遺構分布図

しており、Ｃ地区ではインゴットの可能性が指摘されている円盤状銅製品（C_1004）も出土している。青銅器の製作工房に関連する遺構は確認できていないが、当遺跡近辺での青銅器製作の可能性は指摘できよう。また、SD0382では約6500gのベンガラが長さ約30㎝の範囲にまとまって出土し、その南側の07_42地点では遺物包含層出土ではあるが被熱して固化したベンガラも出土した（写真33）[9)]。さらに、竪穴住居跡内でも粉状のベンガラが馬蹄形状（SB195）や広範囲に散在する状態（SB324など）で確認されている。当時のベンガラの製作工程は不明な点が多く慎重な議論が必要であるものの、当遺跡内でベンガラを加工する行為が成されていた可能性は指摘できよう。なお、Ｃ地区の大溝東側壁面から肩部にかけてアカガシ亜属の根株１点、ヤマグワの根株７点が残存しており、ヤマグワは居住域において意図的に植えられ、同埋土からはモモ・メロン仲間やヒョウタン仲間などの花粉が検出でき、栽培植物の利用の可能性が指摘されている。

写真33　出土したベンガラ
（左：SD0382出土、右：07_42地点出土）

交流・交易　土器類では、瀬戸内地域の土器に類似する壺（B2_6347）、生駒山西麓周辺地域の壺（B2_2927など）、布留式系の甕（B2_6002、C_227など）、湖南地域の甕（B2_663など）、山陰系の鼓形器台（B2_6559）、日本海沿岸地域に出土例が多いスタンプ文のある壺（A1_93、B2_836など）や高坏（A1_199など）、南関東の久ヶ原式に類似する土器（B2_7518）、駿河から相模地域の大廓式の壺（A1_2217）、東日本系の土器（B2_5308）などが出土している。また、当遺跡において顕著な加飾性の強い土器群は滋賀県湖北地方から愛知県一宮市周辺まで多く認められ、広くは兵庫県から群馬県まで分布していることが明らかにされている（藤田2013）。一方、木製品は、北部九州型の直柄鍬（C_1025、市3_4012など）や、日本海沿岸地域に出土例が多い桶蓋未製品（B2_5119）などがある。

小結　弥生時代後期から古墳時代前期には、竪穴住居跡が550軒以上も構築された大集落へと変化した。水田は居住域から大溝を介した場所に営まれ、居住域内では木製品生産が行われている。また、可能性のみに留めるべきであるが、当遺跡やその近辺ではベンガラ加工や青銅器製作も行われていたかもしれない。一方、出土遺物には多種多様な青銅器や儀仗などの木製祭祀具、車輪石片や貝輪形土製品などの装身具、大型船や弧帯文、人面文などが描かれた線刻土器等、特殊な遺物が多数認められる。これらから、当遺跡は生産活動のみならず、祭祀の面でも地域内において重要な役割を果たしていたと考えられる。

４　古墳時代中期以降（Ｘ期以降）（図2614）

地形・景観　古墳時代中期から古代までは、前代まで自然流路であった場所が浅い窪地として残っていた可能性があるものの、中世以降は地形の起伏がほとんどなくなり、広域に渡って耕作地として利用されていたと考えられる。

居住域　Ａ地区において、古墳時代後期以降の掘立柱建物跡１棟（SH001）を検出したが、古代以降の建物跡は確認できなかった。なお、性格は不明であるが、Ａ地区西側では古代の可能性がある井戸

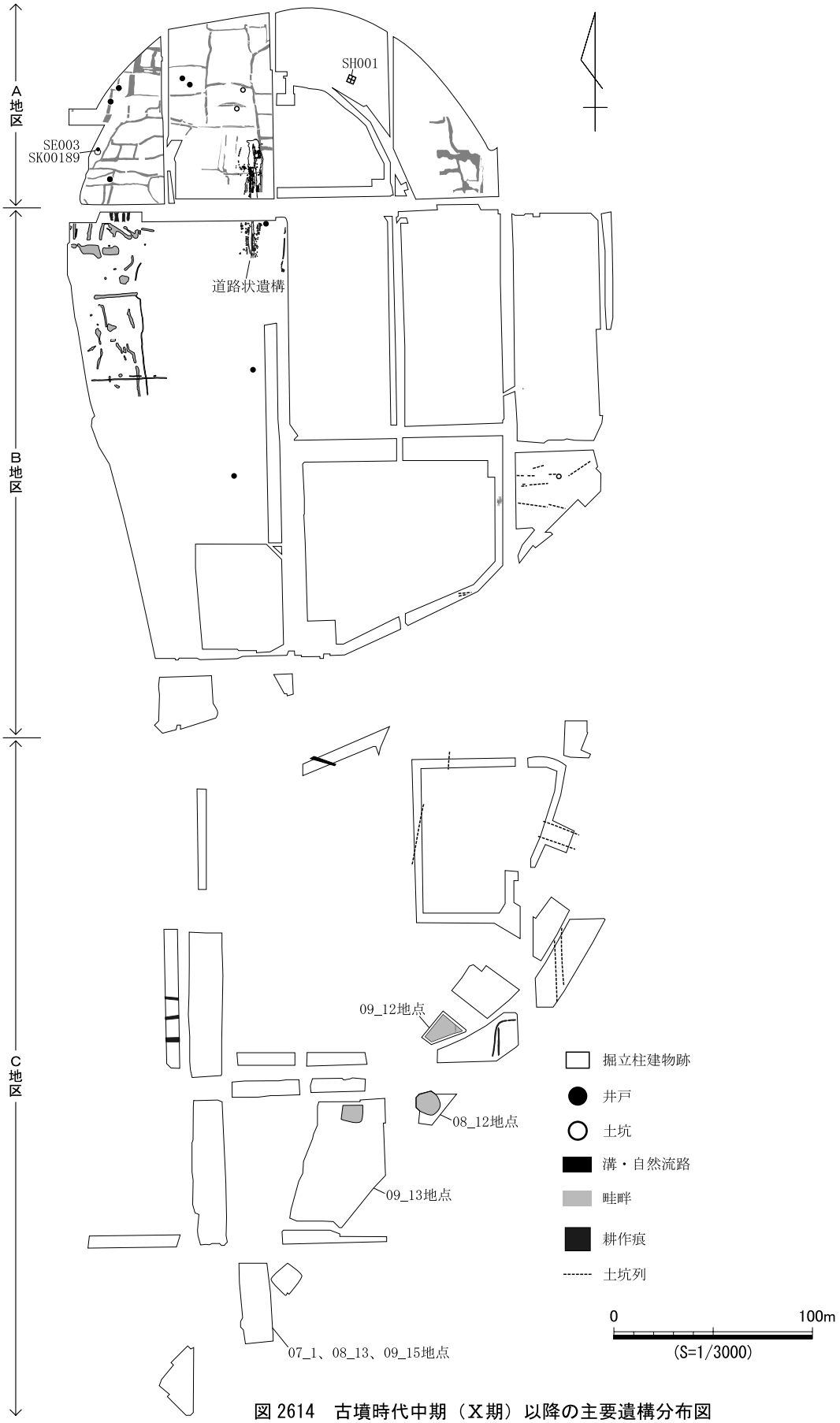


図 2614　古墳時代中期（Ｘ期）以降の主要遺構分布図

跡６基を検出した。出土遺物の時期は10～11世紀頃であり、SE003に関連するSK00189から富壽神寶１枚と斎串などが出土した。岐阜県内における皇朝十二銭の出土例は稀である。

墓域　確認できなかったが、Ａ地区の遺物包含層中から五輪塔の空風輪が出土した。

生産・栽培　Ａ地区からＢ地区西側にかけて水田域を検出した。その上限時期は道路状遺構との関係から中世以降、下限時期は19世紀中葉から明治時代後半頃と考えられる。明治21年の字絵図との整合では、検出した畦畔の一部は村界に相当することが判明している。また、Ｃ地区でも09_12地点で古代以降の可能性が高い畦畔や耕作痕、08_12、09_13地点でも鋤溝状の耕作痕を確認し、09_13地点では古墳時代末から古代と考えられる馬鍬（C_1683）や唐鋤（C_1684）が出土した。なお、性格は不明であるが、Ｂ地区南東側からＣ地区東側にかけて、複数の土坑列を検出した。

交流・交易　瀬戸美濃陶器、常滑陶器、肥前磁器、中国磁器などの流通品があり、Ｂ地区からは石鍋片（B2_4286）も出土した。なお、Ａ地区南端からＢ地区北端にかけて、波板状凹凸面を伴う道路状遺構を検出した。その施工時期は中世である。

小結　古墳時代中期から古代にかけては遺構数が少ないものの、Ａ地区から出土した富壽神寶と斎串、Ｃ地区07_1、08_13、09_15地点のSZc40墳丘面検出の際にまとまって出土した古代の斎串状木製品13点などは、古代の祭祀を考える上で重要である。また、中世以降では水田などの耕作地が広域にわたって展開していたと考えられる。そして、Ａ地区出土の青白磁梅瓶片や五輪塔空風輪、Ｂ地区出土の石鍋や「仏師」と記された墨書のある山茶碗２点などは、道路状遺構と字絵図との整合から指摘されているように、当遺跡北側に位置する御首神社遺跡や円成寺、長方形を呈する地割などと関連付けて理解すべきであろう。

注

1）土坑墓は、その可能性のある土坑も含む。なお、弥生時代中期の土坑墓の数も同様である。
2）遺物番号の記載は、本章第６節の図2608の記載に従う。
3）藤井整氏の御教示による。
4）愛知県烏帽子遺跡で弥生時代前期の報告例があるが、木棺形態は不明である（宮腰2007）。
5）Ⅳ期の竪穴住居跡としてＡ地区のSB012が１軒のみ報告されている（岐阜県文化財保護センター2012a）。しかし、その本文でも記載されているように、本遺構はⅣ－２期のSZ004方台部上に位置し、墳丘構築時の何らかの施設を検討する必要があることと、大半が調査区外に位置し詳細が不明であることなどから、ここでは時期決定を保留としたい。
6）Ｃ地区の遺構数は、平成６年度調査分（岐阜県文化財保護センター1998）と大垣市教育委員会調査分（大垣市教育委員会2003、2008）を含む。なお、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期以降も同様である。また、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡のうち、Ｃ地区のＶ期以前のSBc03は弥生時代後期～古墳時代前期の遺構として数えた。
7）弥生時代の円形周溝墓は東海地方において稀少な存在であり、その機能については墓以外の用途も含めた慎重な議論が望まれる。
8）時期不明の12軒も数値に含めた。
9）固化した赤色顔料の成分分析は実施していないが、同地点からは塊状のベンガラが多数出土していることや、表面観察ではSD0382出土のベンガラに似ていることからベンガラと判断した。なお、八賀晋氏から、SD0382出土のベンガラは風化し粘土質になった石灰岩の表面にベンガラが付着しており、このようなものは過去に当遺跡から北へ約３㎞離れた金生山の露頭で多くみられたこと、固化したベンガラは被熱により赤色の発色が鮮やかになっていることなどの御教示を得た。

参考文献

赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）

赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）

赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集）

赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集）

赤塚次郎 2001「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集）

赤塚次郎 2007「朝日遺跡における金属製品の分布とその特徴について」『朝日遺跡』Ⅶ、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集）

飯塚武司 2001「農耕社会成立期の木工技術の伝播と変容」『古代学研究』第155号、古代学研究会

石黒立人 1999「門間沼遺跡から出土した古墳時代初頭の土器について」『門間沼遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集）

石黒立人・宮腰健司 2007「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生　古希記念考古論文集』、伊藤秋男先生古希記念考古論文集刊行会

伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

近江俊秀 1995「道路遺構の構造－波板状凹凸面を中心として－」『古代文化』第47巻第４号、古代學協會

大垣市 2011『大垣市史　考古編』

大垣市教育委員会 1990『大垣市埋蔵文化財調査概要　昭和63年度』（大垣市文化財調査報告書第16集）

大垣市教育委員会 1993『岐阜県大垣市遺跡詳細分布調査概要報告書（Ⅱ）平成二年度』（大垣市文化財調査報告書第21集）

大垣市教育委員会 1994『新版　大垣市遺跡地図』（大垣市文化財調査報告書第24集）

大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』（大垣市埋蔵文化財調査報告書第５集）

大垣市教育委員会 2001『荒尾南遺跡』Ⅰ（大垣市埋蔵文化財調査報告書第10集）

大垣市教育委員会 2003『荒尾南遺跡』Ⅱ（大垣市埋蔵文化財調査報告書第13集）

大垣市教育委員会 2004『東町田遺跡』（大垣市埋蔵文化財調査報告書第14集）

大垣市教育委員会 2008『荒尾南遺跡』Ⅲ（大垣市埋蔵文化財調査報告書第18集）

大阪府立弥生文化博物館 2012『穂落とし神の足跡―農具でひもとく弥生社会―』（大阪府立弥生文化博物館図録47）

大手前大学史学研究所 2010『弥生・古墳時代銅鏡出土状況資料集　日本考古学協会2010年度兵庫大会第２分科会「古墳出現過程と銅鏡」資料集』

長田友也 2013「儀器からみた馬見塚遺跡」『論集馬見塚』考古学フォーラム

加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年－東海編－』木耳社

関西縄文文化研究会 2007『関西の縄文土器　発表要旨集』（第８回縄文文化研究会）

岐阜県博物館 2013『特別展「弥生大集落～荒尾南遺跡が語るモノと心～」展示図録』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1997『堀田城之内遺跡　岐阜環状線建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第30集）

財団法人岐阜県文化財保護センター 1998『荒尾南遺跡　大垣環状線建設工事に伴う緊急発掘調査報告書』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第26集）

岐阜県文化財保護センター 1998『今宿遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第37集）

岐阜県文化財保護センター 2000『顔戸南遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第58集）

岐阜県文化財保護センター 2012a『荒尾南遺跡Ａ地区』Ⅰ（岐阜県文化財保護センター調査報告書第119集）

岐阜県文化財保護センター 2012b『荒尾南遺跡Ｂ地区』Ⅰ（岐阜県文化財保護センター調査報告書第121集）

岐阜県文化財保護センター 2013『荒尾南遺跡Ａ地区』Ⅱ（岐阜県文化財保護センター調査報告書第127集）

岐阜県文化財保護センター 2014『荒尾南遺跡Ｃ地区』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第129集）

車崎正彦 2002「中国鏡と倭鏡」『考古資料大観　第５巻　弥生・古墳時代　鏡』小学館

国立歴史民俗博物館編 1994『共同研究　日本出土鏡データ集成　２　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』（国立歴史民族博物館研究報告第56集）

小竹森直子 2007「近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート」『紀要』20、（財）滋賀県文化財保護協会

櫻井拓馬 2011「伊勢湾沿岸における弥生後期の石器と鉄器」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期篇　伊勢湾岸域の後期弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト

滋賀県教育委員会 2001『上出Ａ遺跡』（県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2）

島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版

関市教育委員会 1994『松原遺跡』（関市文化財調査報告第19号）

高木宏和・鈴木元・小野木学・村木誠・宮腰健司・石黒立人2000「濃尾地方における古墳時代初頭の地域性」『Ｓ字甕を考える』（第７回東海考古学フォーラム）

寺沢薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』木耳社

鳥取県埋蔵文化財センター 2005『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告１　木製容器・かご』（鳥取県埋蔵文化財センター調査報告８）

中村豊 2013「凸帯文土器と遠賀川式土器-東部瀬戸・紀伊水道沿岸地域の土器から-」『弥生土器研究の可能性を探る』弥生土器研究フォーラム

早野浩二 2011「東三河における弥生時代後期から古墳時代前期の集落構成」『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・後期篇　伊勢湾岸域の後期弥生社会』伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト

樋上昇 2010『木製品から考える地域社会―弥生から古墳へ―』雄山閣

福永伸哉 1987「5.木棺墓」『弥生文化の研究　第８巻　祭と墓と装い』雄山閣

藤田英博・高木宏和 2002「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』、木耳社

藤田英博 2013「弥生時代終末から古墳時代前期の加飾土器群の検討」『弥生土器研究の可能性を探る』弥生土器研究フォーラム

文化庁文化財部記念物課 2010『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』同成社

宮腰健司 2007「伊勢湾周辺地域における方形周溝墓の埋葬施設」『研究紀要』第８号、愛知県埋蔵文化財センター

山田昌久 2012「弥生時代の木工技術と農具生産」『穂落とし神の足跡―農具でひもとく弥生社会―』大阪府立弥生文化博物館

山村信榮 2001「古代道路の構造」『古代交通研究』第10号、古代交通研究会

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第 131 集

荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅱ

（第８分冊）

2015 年 3 月 13 日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1
印　　刷　株式会社もとすいんさつ